

『浄家寺鑑』 覚書―浄土宗寺院伝来の仏像調査に向けて―

熊谷貴史

はじめに

「浄家」とは「浄土宗」のことをいう。『浄家寺鑑』八巻四冊は、洛中に所在する浄土宗寺院を収録した私撰の寺院名鑑である。著者は摂州三田の出身で花洛(京都)に寓居したという医者、森本迪菴(受戒名…方誉向西)。刊行は寛文八年(一六六八)、森本徳之助(迪菴の子息)によることが刊記にみえる。

本年度、佛教大学宗教文化ミュージアムの秋期特別展において『浄家寺鑑』(佛教大学附属図書館所蔵)を出陳した⁽¹⁾。かかる準備を進めるなかで、別途、次年度以降に実施を検討している「浄土宗寺院伝来の仏像調査」⁽²⁾に本資料を活用しうる可能性が予見された。

浄土宗寺院に祀られる仏像は、本尊に阿弥陀如来像、その脇侍像として観音菩薩・勢至菩薩が従う三尊形式、さらに善導・法然の両祖師像を配す構成などを通例とする。一方、浄土宗に属す寺院のなかにも、宗旨とは異なるコンテキストで祀られ信仰を集める仏像が散見する。

例えば浄土宗開宗以前の御像、安置されている寺院の創建以前にさかのぼる御像、あるいは寺勢の盛衰による遷座を経て客仏として安置される御像など、しばしば意外な来歴・伝承をともしない尊崇を受ける御像も少なくない。それらは各寺院や地域の活性に寄与し、信仰の支えとなった側面もあるだろう。

こうした浄土宗寺院伝来の仏像調査については改めて趣意を示す機会をもちたいが、本稿はそれに先立つ予備作業として『浄家寺鑑』を概観する。併せてのちの調査研究を視野に入れた掲載寺院一覧の作成を目的に、近世洛中における浄土宗寺院を一瞥したい。

一、書誌・構成など

佛教大学附属図書館には現在二組の『浄家寺鑑』が所蔵され、ともに準貴重書に指定されている。このうち本稿では「G佛書/2105/1-4」の請求記号が付された資料を底本とする⁽³⁾。まず基本的な書

誌について、『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』⁽⁴⁾を参照しつつ、若干の整理を加え確認しておこう。

〔書誌〕

書名…浄家寺鑑(ジヨウケジカン)
 巻数…八巻
 冊数…四冊
 著者…森本迪菴(モリモト テキアン)
 出版者…森本氏徳之助
 出版地…洛陽(京都)
 出版年…寛文八年(一六六八)
 寸法…二二・三×一六・三cm
 刊・写…刊本
 装訂等…四つ目袋綴 四周双辺無界 每半葉八行
 外題…山城國中浄家寺鑑
 柱題…寺鑑
 刊記…「右此寺鑑者予父森本氏迪菴書記／するものなり(中略)時維寛文八戊申暦／秋八月時正日／森本氏徳之助／是を開板致しむるもの也／所は洛陽猪熊通中立賣上ル小寺町」
 印記…「西莊文庫」「雲達」
 墨書記…「酉天」
 その他…前集上一の冒頭に「寺鑑解義」「凡例」「寺鑑を見給ふの法」を記す

外題(題簽)は「^{山城} 浄家寺鑑^{前集}」の形式で、四冊ともに「前集」(前集上一、前集上二、前集下一、前集下二)と記されている。巻之一「寺鑑解義」によると、本書は前集として洛中の寺院を対象とし、のちに洛外の寺院をまとめて後集を刊行する予定であったとみられるが、残念ながら実現はしなかったようである。柱題は「寺鑑」を基本とし、後掲の構成事項に対応して「寺鑑解義」「寺鑑凡例」「寺鑑見給ふの法」「寺鑑巻一二目録」「寺鑑巻二」…と続く。

柱(版心)に刷られた丁数は四冊通して二百四十二。ただし重複している数字があること、目録部分および刊記には数字が刷られていないことから実際の丁数は十丁ほど増えるが、本稿では便宜的に印字された丁数を用いて該当箇所を示す。なお印字された丁数は前集上一が一〜七十、前集上二が六十九〜百二十五、前集下一が百廿六〜百八十五、前集下二が百八十六〜二百四十二である。次いで全体の構成を確認しておこう。以下、括弧内の丁数は項目または引用部の起点を示し、異体字は基本的に常用漢字に変換する。

〔構成〕

前集上一(巻之一・巻之二)

寺鑑解義(二丁オ)

浄家の寺院へ参詣せしむるに凡例はある条々(十二丁オ)

御本寺参の事(十二丁オ)

御忌参の事(十二丁ウ)

涅槃会参の事(十四丁ウ)

彼岸参の事(十五丁オ)

善導忌参の事(十五丁オ)

卯月八日誕生会 并 灌仏の会花折の事(十五丁ウ)

夏花摘事(十六丁ウ)

知恩院中興開山忌参の事(十七丁オ)

霊宝の虫払ひはある御事(十八丁ウ)

施餓鬼参の事(十九丁オ)

長谷村念仏踊見物せしむる事(二十丁オ)

城東浄土寺山に大文字に火をともし聖霊の送り火と号せしむる事(二十丁ウ)

六地藏参の事 附たり 地藏祭りを致さしむる事(二十二丁オ)

知恩院鏡の御影開帳はある事(二十五丁オ)

洛陽六ヶ所の霊寺十夜会念仏勤行はある事(二十五丁ウ)

七如来参の事(二十七丁オ)

洛陽三十三所順礼札所の事(二十九丁オ)

三十五ヶ寺女人往生の願参の事(二十九丁オ)

洛陽四十八願参の事(二十九丁ウ)

洛陽浄家百八ヶ寺参の事(三十丁オ)

浄家の寺院開山忌参の事(三十丁ウ)

六時を勤め念仏し給ふ事(三十丁ウ)

七日別時念仏参の事(三十一丁オ)

三七日別時念仏参の事(三十一丁ウ)

四十八夜別時念仏参の事(三十二丁オ)

千日不断念仏参の事 附たり 念仏の行者には定て諸仏護念し

給ふに現証はある事(三十四丁オ)

百日不断念仏参りの事(三十六丁ウ)

常念仏勤行はある事(三十九丁オ)

寺鑑を見給ふの法(四十丁オ)

寺鑑卷之一二目録(丁数無記)

寺鑑卷二(四十五丁オ)

前集上二(卷之三・卷之四)

寺鑑卷之三目録(丁数無記)

寺鑑卷三(六十九丁オ)

寺鑑卷四(百丁オ)

前集下一(卷之五・卷之六)

寺鑑卷之五六目録(丁数無記)

寺鑑卷五(百廿六丁オ)

寺鑑卷六(百五十六丁オ)

前集下二(卷之七・卷之八)

寺鑑卷之七八目録(丁数無記)

寺鑑卷七(百八十六丁オ)

寺鑑卷八(二百十四丁オ)

刊記(丁数無記)

前集上一の巻之一から巻之二冒頭までは導入的な項目が立てられ、劈頭、「寺鑑解義」においてまず刊行の経緯・趣旨などが述べられる(後述)。

次いで「浄家の寺院へ参詣せしむるに凡例はある条々」(以下、「凡例」)には、参詣の手引きに相当する小項目二八件が記され、「善導忌参の事」「知恩院鏡の御影開帳はある事」「洛陽浄家百八ヶ寺参の事」など浄土宗にまつわる記事のほか、「六地藏参りの事」「七如来参の事」「洛陽三十三所順礼札所の事」「洛陽四十八願参の事」のように、浄土宗の枠をこえた信仰・巡礼の諸態にも眼を配っており、広く参詣をうながす名所案内的な側面がうかがえる(いずれも浄土宗寺院を含む)。

浄土宗のいわゆる京都四箇本山(吉水知恩院・新黒谷光明寺・百万反知恩寺・下御所浄花院/現在の寺院名・用字と一部異同あり)における什宝の曝涼を記す「霊宝の虫払ひはある御事」なども、読み手に参詣意欲を抱かせるトピックといえるだろう。あるいは「城東浄土寺山に大文字に火をともし聖霊の送り火と号せしむる事」は、京都の夏の風物詩として名高い「送り火」の由来(弘法大師に仮託する一説を、浄土宗的解釈を交えて紹介しており興味深い)。

本書の主体である「寺鑑」部分は巻之二から巻之八にわたり、列記された寺院は二二八ヶ寺におよぶ。掲載寺院には各々番号が振られているが、一部に重複する番号があるほか、目録部分と寺鑑本編の番号および記載順序に錯簡が認められる。諸寺の記載事項は、寺格または本末関係・御本尊の説明・寺院名・所在地(以上は概ね諸寺共通)、さ

らに由緒・年中行事・什宝などを含む場合があり、寺院によって記述の粗密はあるものの、当時としての情報収集の労に驚かされる。その成果は、寺鑑(寺院名鑑)といっても単に名簿的な内容にとどまらず、さながら宗派と地域を特集したガイドブックのようだ。江戸時代には数多くの地誌類が制作され、観光文化に寄与したことが知られる。そのうち京都の体系的な地誌『雍州府志』に二〇年近く先行する本書は、比較的早い段階の京都の地誌的性格を具えた資料といえよう。

二、刊行の経緯・趣旨——「寺鑑解義」より——

ここでは「寺鑑解義」を要約(または抜粋)し、留意すべき点を押えながら『浄家寺鑑』刊行の経緯と趣旨を確認する。まず本書を制作する所以として、先人の参詣談が紹介されている。ひとつは萬治年中の頃、肥前国杵嶋の住人井上七兵衛という信男士が、九州、四国、五畿内、宿々在々村々里々の浄家の寺院三千寺を参詣し、霊仏三千体を拝み奉らんとする大願を思いたち、所願成就したという。

また寛文三年の頃、武陽江戸に居住する善男子、浄悦なる人物が武陽国中の浄家の霊寺を残らず参詣した。しかし一千寺に満たないことから、江戸を出て大坂に至るまで宿々道中の左右半里を限り再々所々浄家の寺院に参詣し札を打ち、あるいは札に参銭を挟み仏前に安置するなどしながら一千寺を参詣し、霊仏一千体を拝んだという。江戸を出てから六ヶ月を経て所願成就、花洛(京都)で休息していたところ森

本迪菴と浄悦に宿縁があり、対面してかくのごとくの物語を聞く。その外、このような所願成就を果たした人物は天下に多くいるが、種々聞き及んでいないのでは記さない、とする。

これらの参詣談に触発され、迪菴も願を立て参詣する。すなわち「予も亦是に例して山城国中浄家の寺院残らず参詣し、一千寺の分不足はあるにおゐてハ城陽の隣国浄家の寺院に参詣し、一千寺の分札を納め奉らんと欲する願望、寛文五年の春おもひたち、ある時ハ十ヶ五ヶ三ヶ寺参り、心にまかせて参詣せしめ畢」(二丁ウ)という。直に話を聞いた浄悦の参詣に倣い、参詣の範囲や寺院数を設定したのでろう。むろん信仰心に基づくことは認されるが、「心にまかせて」の文言からは、幾分ゆとりのある観光的な寺院めぐりの気分もうかがわれる。

反面、迪菴は強い探求心をもって参詣に臨んでおり、その意欲は各所での聞き取りや記録に結びついている。「洛中洛外在々所々村々里々浄宗の寺院、本末分明なるハ本寺末寺を書とめ、霊仏をおがミ奉る時は御本尊の御作者をたづね、毎年月を究め日を究め浄土宗の寺々におゐて道俗男女参詣せしむる其しなく皆ことくく書集め」(三丁オ)というこの作業が、『浄家寺鑑』の根幹になる。なお迪菴が記録を重ねた目的は、一子(徳之助・出版者)に自身と同じく一千寺参りを促すためであった。しかし迪菴の善友が此書(記録を見て、世に出ず埋もれてしまうのは惜しいと出版を進めたことにより、「是を開板せしめて山城国中浄家寺鑑と表題し奉る者也」(四丁オ)という。元来、出版を意図しない私的な記録ではあったが、その成果は当時の人の眼にも価値あるものと認識されたようだ。

前述の通り本書は前集として「但、洛中寺鑑前集ハ寛文八戊申秋八月に是を開板せしめ畢、洛中といふハ王城の四方土手よりうちをいふ」(四丁オ)の範囲で、迪菴が参詣を思い立った寛文五年春からおよそ三年を経て出版された。果たされなかった(とみられる)後集については、小原、鞍馬、北山、梅畑、西岡、鳥羽、淀、八幡、橋本、伏見、稻荷、宇治、醍醐、山科などに範囲を広げ、「其外村々里々浄土宗の霊寺霊仏、大方見及び聞及ぶ所皆ことくく書載、かさねて是を板行せしむべきものなり」(五丁オ)と、刊行を予定していたことが記されている。前集に記載されている寺院は二二ヶ寺、迪菴が目標とした一千寺の参詣が達成されていたとすれば、後集にはより多くの寺院を記載する予定であっただろう。

なお迪菴は記載する内容について一定の線引きをしている。例えば「豎横の図子小路、広多なるゆへ、寺地委悉にハ是を記し難し」(四丁ウ)といい、あるいは寺地移転にかかる情報の不足などから記載を控えたことも多いという。自身が言及し得なかった事柄については「定て残る所もおほかるべし、後人委曲に増補せしむべき者也」(五丁ウ)と述べており、転じて記述・刊行に臨む堅実な態度がうかがえる。

以上によって刊行の経緯は概ね知られるが、さらに刊行にかかる積極的な趣意も記されている。引き続き幾つか書き出しておこう。まず「浄宗に三流の霊寺あり、参詣して此霊仏を拝み奉らんと欲し侍るに、此寺鑑を一覧はあるにおゐてハ、誠に渡りに船を得たるかことく、明鑑に面を移せしかごとし」(五丁ウ)と、浄土宗寺院の参詣に際する利便性が示される。

続けて「予かごときの所願是ありて、本朝一國／＼の寺鑑を著述し是を梓に鏤めハ、其国々の浄家に至らずして靈寺をしり、参詣せずして靈仏を目の前に拝み奉りなん」(五丁ウ)といい、山城国を対象とする本書(前集では洛中)のみならず、全国規模の寺鑑制作を視野に入れていたことが知られる。またその意義を、実際に現地に赴かず疑似的な参詣を成立させるためのツールとして位置付けている点が興味深い。加えて、その効果を示す事例として「この願蓋惟れハ神道仏道宗教はおなじ、例せば洛陽吉田の神廟へひとたびあゆミを運びし輩ハ、日本六十余州三千七百余社の諸有靈神を拝みたてまつるに異ならざらんや」(六丁オ)と記す迪菴の宗教感覚も留意される。

むろん浄土宗信徒として宗旨によせた言及もみられ、例えば「誠に有難かな浄土三部妙典大經にいはいはく、当来之世經道滅盡我以慈悲哀愍独留此經止住百歳と説給へり」(八丁オ)など、經文を引いて釈義を加えた記述も散見し、一定の教義的知識を具えていたことが読み取れる。

注目されるのは浄土宗寺院と他宗の寺院を相対的に記した箇所で、「いま山城一國浄家の靈寺と余宗の寺地と多少をいはく浄家半に過たり、余宗の寺地是ありて僧侶ハ其法を修し給ふといへとも其檀越ハ皆是口称の一法を安心の起行とせり、是によりて是を觀れハ四輩の群類おほくハ一同の念仏なり、此故に余宗の寺地浄宗の寺地と成興し奉りたる先例はおほし、いまこゝに是を記すに及ばず往て見給ふべき者也」(七丁オ)という。信徒として浄土宗の優位性を強調しようとする感はあるものの、当時の浄土宗寺院の割合の多さや、その時点までの改宗・再興の様相を反映した記述といえ、またそれを特記している点

も意義深い。このことは本稿の展望として冒頭に触れた「浄土宗寺院伝来の仏像調査」においても考慮に値する。

導入にあたる「寺鑑解義」は、書き手としての趣旨を明示するとともに、読み手に対する指南の心がある。その締め括りの部分を抜き出しておこう。「有難きかな浄法は末法相應の御法にして、修しやすく行しやすきが故に、澆季の衆生ハ西方淨刹に往生せん事を念ずるか故に、浄教浄法ハ興盛し弘隆す、是又自然天然の妙理なり、人力のよく及ぶ所にあらず、有難かな浄家の寺々にハ万部千部頓写漸写の御經年月を究す是あり、又ハ万日千日四十八夜三七日の別時御念仏乃至一夜の別時又ハ省念仏是あり、其外浄家の寺々へ参詣せしむる其しなく三千寺参り一千寺参り百八ヶ寺参り四十八願参り殊にハ女人往生の願参り三十五ヶ寺又ハ七如来参り、皆こと／＼凡例に見したり、あるひハ浄宗の寺々にハ甚深微妙の説法毎日是あり、かくのごとく浄法繁昌の仏国に生れ念仏衆生撰取不捨の御利益を蒙り給ふ事、まことに飲ても猶喜び、信しても猶信し給ふべきもの也」(十丁ウ)。一部、「寺鑑解義」に続く「凡例」から幾つかの項目を抽出、例示して読み手をいざなう。なお「凡例」にも当時の参詣をめぐる有用な情報が含まれているが、いまは深く立ち入らず、項目のみ前掲の「構成」に示しておく。

三、『浄家寺鑑』掲載寺院一覧

および仏像・什宝の記述について

『浄家寺鑑』は各冊に目録(寺名+番号)を設け、読み手の利便性を図っている。しかし前述の通り番号が一部重複するほか、目録に示された番号や順序と寺鑑本編のそれには錯簡がある。一部、重複する番号の後出分に「又」が付されており調整を試みたようであるが、なお乱れを残す。そのため後掲の一覧では、本編中の記載箇所を特定する便宜を優先し、本編記載の番号と順序に従い、併せて柱(版心)に刷られた丁数を記す。丁数・番号・寺院名のほか、本一覧では寺格もしくは本末関係・御本尊の説明・所在地などの基礎情報を併記、加えて記事内における仏像および什宝に関する詳細・付帯情報の有無を備忘的に示し、のちの調査研究に備えたい。

なお留意すべき点は一覧の凡例に記したが、本書は寛文八年(一六六八)に出版されたものであり、例えば宝永の大火(宝永五年(一七〇八)に起因する大規模な移転に先立つ資料である。したがって所在地をはじめ現状とは異なる点も散見する。

さて本稿の趣旨に照らし寺鑑本編に眼を通すと、まず寺院名の上部に大きく御本尊の説明がある点に特徴が見出せる。迪菴が参詣の際に「霊仏をおがミ奉る時は御本尊の御作者をたづね」(三丁オ)記録した成果である。尊像名ではなく「御本尊〇〇の御作」のように制作者を尋ね記したのは、浄土宗寺院として阿弥陀如来(三尊形式等を含む)を

本尊とすることが自明であるからか。もつともここに記された作者は、聖徳太子、弘法大師、慈覚大師、恵心(源信)など、あくまで伝承の域をでない。しかし少なくとも当時の人々の眼には、いにしえより護持された古像として不自然には映らなかったのだろう。

また現代のように整理・蓄積された史的情報を有していなかったとはいえ、鎌倉時代の宗祖法然上人に先立つ偉人が散見することは、改宗・復興を含め、宗門および寺史の古層を公然と許容している。一方、造寺造仏伝承に頻出する聖徳太子(一八件)、行基(四件)、弘法大師(五件)に比し、日本浄土教の濫觴をなした慈覚大師(二七件)、恵心(四八件)の割合が多いことは、浄土宗寺院としてのアイデンティティの表出といえよう。仏師名では安阿弥・快慶(三七件)が最も多いことも同じ傾向といえようか。次いで伝説的な仏師、春日(二二件)の名も多い。ほかに運慶(八件)、湛慶(一件)、遡って定朝(六件)、鳥止利仏師(二件)などもみえる。

例外的な記述として眼に留まるのは、禅林寺永観堂(五十五丁ウ)、新善光寺(六十二丁ウ)、地藏院(七十九丁ウ)、如来寺(二百卅九丁オ)で、像容にかかる説明となっている。永観堂はいわゆる「見返り阿弥陀」として知られる特異な姿を特記。新善光寺は別に小項目を立て、「善光寺式阿弥陀」としての由来を記す。如来寺も「善光寺式阿弥陀」であることを明示。地藏院(通称・椿寺)の御本尊は「思惟の尊形」と記されており、これは現在も本尊として祀られている「五劫思惟阿弥陀」の御像に相当する。いずれも尊格としては阿弥陀如来になるが、特殊な像容や由来を見聞した際にはそれを優先して記したこと

『浄家寺鑑』掲載寺院一覧

〔凡例〕

- ・本一覧は佛教大学附属図書館所蔵の『浄家寺鑑』（請求記号：G 佛書／2105／1～4）に基づく。
- ・異体字は常用漢字への変換を基本とし適宜用字を改めた。
- ・現在の呼称・用字とは異なる場合がある。
- ・寺地移転により現在の所在地と異なる場合がある。廃寺の場合を含む。
- ・「丁数」の欄に記した数字は、柱(版心)の印字に基づく(実際の丁数とは一致しない)。また各寺の記事の起点を示す(オ＝表/ウ＝裏)。
- ・「丁数」「番号」「寺院名」の欄に「※」を付した箇所は、数字の重複や順序の乱れ、目録と本文の異同等を示す(一覧の表記は本文に依拠)。
- ・「仏/什」の欄に「○」を記した寺院の記事には、一覧に記載した基礎情報のほかに仏像および什宝に関する情報が記されていることを示す。
- ・冒頭の「知恩院」は導入的な記述になり、実質、「吉水 大谷寺」に相当するため一括した。

(1)

丁 数	番 号	寺 院 名	寺格・本末関係	御 本 尊	所 在 地	仏/什
前集上一 巻之二						
四十五丁オ		知恩院	日本浄土宗総本山		洛陽東山	
四十五丁オ	第一	吉水 大谷寺	鎮西四ヶ御本寺の随一	御本尊安阿弥の作	所ハ東山祇園の近隣	○
四十八丁ウ	第二	新黒谷 光明寺	同四ヶの御本寺の随一	御本尊恵心の御作	所ハ東山岡崎	○
五十二丁オ	第三	百万反 知恩寺	同四ヶの御本寺の随一	御本尊春日の御作	所ハ東山吉田の近隣	○
五十二丁ウ	第四	下御所 浄花院	同四ヶの御本寺の随一	御本尊恵心の御作	所ハ京極通今出河より三町下ル東かわ	○
五十三丁ウ	第五	粟生野 光明寺	西山両御本寺の随一	御本尊恵心の御作	所ハ西岡向明神の近辺	○
五十五丁ウ	第六	永観堂 禅林寺	同両御本寺の随一	御本尊御見返りの御相好 弥陀尊の御直作といへる伝記是有	所ハ東山新黒谷の近辺	○
五十七丁オ	第七	円福寺	深草流義御本寺	御本尊三尊共法然上人の御作	所ハ京極通四条坊門下ル東かわ	○
五十九丁オ	第八	誓願寺		御本尊春日の御作	所ハ京極通三条下ル東かわ	○
六十丁オ	第九 ※	佛陀寺	西山両御本寺末寺	御本尊恵心の御作	所ハ同通今出川より三町上十念寺の南隣	○
六十二丁ウ	第十 ※	新善光寺	知恩院御末寺	御本尊の御事ハ左に立	所ハ五条橋通下ル寺町本覚寺の南隣	○
六十五六丁ウ ※	十一	長講堂		御本尊恵心の御作	所ハ同所連光寺の南隣	○
六十七八丁ウ ※	第十二	花開院	浄花院御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所ハ京極通筋違橋上ル町東かわ	○

前集上二 巻之三

六十九オ丁 ※	十三	昌福寺	黒谷御末寺	御本尊弘法大師の御作	所ハ智恵光院通出水南へ行あたる所	○
六十九オ丁 ※	十四	松林寺	同断	御本尊聖徳太子の御作	所ハ同所昌福寺の西隣	○
七十丁ウ ※	十五	善福寺	百万反御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所ハ千本通出水西へ入南かわ	○
七十一丁ウ	十六	勝岩院	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の御作	所ハ下立売通千本西へ入町南かわ	○
七十二丁ウ	十七	弘誓寺	同断	御本尊安阿弥の御作	所ハ同通勝岩院より一町西北かわ	
七十三丁オ	十八	祐正寺	百万反御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ同町弘誓寺の西隣	○
七十三丁ウ	十九	松月院	同断	御本尊慈覚大師の御作	所ハ七本松通下立売通上ル寺町西かわ	
七十四丁オ	二十	大雄寺	黒谷御末寺	御本尊三尊共に恵心の御作		○
七十五丁オ	廿一	観音寺	百万反御末寺	御本尊行基菩薩の御作	所ハ同所福寿院の南隣	
七十五丁オ	廿二	福寿院	同断	御本尊尊ねさる也	所ハ同所観音寺の北隣	
七十五丁ウ	廿三	正覚寺	浄花院御末寺	御本尊同断	所ハ同所福寿院の北隣	
七十六丁オ	廿四	浄円寺 ※	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ七本松通下立売の北かわの北かと	
七十六丁オ	廿五	教善寺	黒谷御末寺	御本尊運慶の御作	所ハ同所浄円寺の西隣	○
七十六丁ウ	廿六	自性院	浄花院御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ下立売西京西蓮寺の図子上ル西かわ	
七十六丁ウ	廿七	浄徳院	同断	御本尊安阿弥の作	所ハ同所自性院の北隣	
七十七丁オ	廿八	西蓮寺	同断	御本尊恵心の御作	所ハ下立売通西京東町北かわ	○
七十九丁オ	廿九	清蓮寺	浄花院御末寺	御本尊春日の御作	所ハ西京北野の馬場下立売より二町下り 東へ入北かわ	
七十九丁オ	卅	竹林寺	西山両御本寺御末寺	御本尊春日の御作	所ハ西京北野の馬場通下立売西へ二町目北かわ	
七十九丁ウ	三十一	弘誓寺	東の弘誓寺の下	御本尊尊さる也	所ハ同所下立売半町上の通紙屋河の北角	
七十九丁ウ	三十二	竹林寺		御本尊聖徳太子の御作	所ハ同通紙屋河より一町西南かわの図子	
七十九丁ウ	三十三	地藏院	知恩院御末寺	御本尊思惟の尊形	所ハ西京上大将軍紙屋河の西かと	○
八十一丁オ	三十四	成願寺	浄花院御末寺	御本尊春日の御作	所ハ同所地藏院より菅町東南かわ	○
八十一丁ウ	三十五	浄光寺	知恩院御末寺	御本尊春日の御作	所ハ北野右近の馬場下ル西かわ	
八十一丁ウ	三十六	東光寺	同断	御本尊安阿弥の作	所ハ同所浄光寺の南隣	○
八十四丁ウ	三十七	長円寺	百万反御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ同所祐泉寺の北隣	
八十四丁ウ	三十八	専福寺	浄花院御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ同所東かわ回向院の南隣	
八十五丁オ	四十六 ※	回向院	黒谷御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ同所専福寺の北隣	○

『浄家寺鑑』 覚書—浄土宗寺院伝来の仏像調査に向けて—(熊谷貴史)

(2)

丁 数	番 号	寺 院 名	寺格・本末関係	御 本 尊	所 在 地	仏/什
八十六丁ウ	三十九 ※	西正寺	黒谷御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所ハ同所回向院の東後	
八十六丁ウ	四十 ※	金泉寺	西山両御本寺御末寺	御本尊八幡の御作	所ハ同所西正寺の南隣	
八十六丁ウ	四十一 ※	報土寺	知恩院御末寺	御本尊三尊共に安阿弥の作	所ハ千本通中立売半町下り西へ二丁目北かわ	○
八十九丁ウ	四十二 ※	国生寺	黒谷御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所ハ同所報土寺の東隣	○
九十二丁ウ	四十三 ※	長徳院	同断	御本尊慈覚大師の御作	所ハ同所国生寺の東隣	
九十三丁オ	四十四 ※	大超寺	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ千本通一条東へ入北かわ	○
九十四丁ウ	四十五 ※	浄福寺	同断	御本尊三尊共恵心の御作	所ハ千本通大超寺東隣	○
九十七丁ウ	四十七	智恵光院	同断	御本尊三尊共に安阿弥の作	所ハ浄福寺より一町東一条上ル町西かわ	○

前集上二 巻之四

百丁オ	四十八	長栄寺	知恩院御末寺	御本尊定朝の作	所ハ智恵光院より半町上東へ入北かわ	○
百一丁ウ	四十九	興林寺		御本尊尋ねさる也		○
百二丁オ	※	香林寺	知恩院御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所ハ千本通より一町西誓願寺上ル町西かわ	
百二丁オ	五十 ※	護念寺	同断	御本尊弘法大師の御作	所ハ香林寺と同町東かわ	
百二丁ウ	五十一 ※	親縁寺	同断	御本尊定朝の作	所ハ同通護念寺より一町上佐竹町西かわ	○
百四丁ウ	五十二 ※	瑞雲院	同断	御本尊春日の御作	所ハ千本通五辻より三町上西かわ	○
百十一丁オ	五十三 ※	石像寺	百万反御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ瑞雲院と同町東かわ	○
百十四丁オ	五十四 ※	昌福寺	一心院御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所ハ千本通寺の内西へ半町入南かわ	
百十四丁オ	五十五 ※	善福寺	知恩院御末寺	御本尊春日の御作	所ハ同所昌福寺の西かとより下ル東かわ	
百十四丁ウ	五十六 ※	無量寺	同断	御本尊慈覚大師の御作	所ハ同所善福寺の南隣	○
百十五丁オ	五十七 ※	梵行寺	無量寺下	御本尊尋ねさる也	所ハ同所無量寺より半町南へ下ル東かわ	
百十五丁オ	五十八 ※	長福寺	百万反御末寺	御本尊行基菩薩の御作	所ハ千本通寺の内西へ半町入北かわ	
百十五丁ウ	五十九 ※	浄光寺	黒谷御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ同通東へ入北かわ	○
百十六丁ウ	六十 ※	称念寺	一心院末寺	御本尊三尊共に恵心の御作	所ハ寺の内通猪熊上ル枕町西かわ	○
百十九丁ウ	六十一 ※	徳寿院	知恩院御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所ハ称念寺の上東へ入北かわ	
百二十丁オ	六十三	真教寺	同断	御本尊安阿弥の作	所ハ智恵光院通寺の内より二町上西かわ	
百二十丁オ	六十四	雲林院		御本尊安阿弥の作	所ハ雲林院村	
百二十丁オ	六十五	来迎寺		御本尊尋ねさる也	所ハ大徳寺の門前	
百二十丁ウ	六十六	楽邦庵		御本尊尋ねさる也	所ハ出在家村	
百二十丁ウ	六十七	安善寺		御本尊同断	所ハ大門村	
百二十丁ウ	六十八	招善寺	一心院末寺	御本尊恵心の作	所ハ紫竹村	○
百二十一丁ウ	六十九	安楽庵		御本尊尋ねさる也	所ハ同村	
百二十一丁ウ	七十	西林寺		御本尊同断	所ハ同村	
百二十二丁オ	七十一	光念寺	百万反御末寺	御本尊運慶の作	所ハ上野村	○
百二十二丁ウ	七十二	地藏寺	専称寺末寺	御本尊尋ねさる也	所ハ同村	
百二十二丁ウ	七十三	称名院	西山両御本寺末寺	御本尊慈覚大師の御作	所ハ今宮御旅所一町西行北裏	
百二十二丁ウ	七十四	超勝院	知恩院御末寺	御本尊役行者の御作	所ハ同御旅所より一町下り東へ入二階町北かわ	○
百二十五丁オ	七十五	長教寺	百万反御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ天神の図子東へ入扇子町北かわ	

前集下 巻之五

百廿六丁オ	七十六	報恩寺	知恩院御末寺	御本尊三尊共に安阿弥の作	所ハ上立売通小河西へ入北へ上ル西かわ	○
百三十五丁オ	七十七	西福寺	一心院末寺	御本尊聖徳太子の御作	所ハ上御雲の前一町上西へ入町北かわ	
百三十五丁オ	七十八	浄善寺	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ京極通鞍馬口へ行当り東へ入北かわ	○
百三十七丁ウ	七十七 ※	西向寺	黒谷御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ浄善寺より二町東へ行下ル西かわ	○
百三十八丁オ	七十 ※	西園寺	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所ハ京極通鞍馬口下ル東かわ	
百三十八丁オ	七十一 ※	念仏寺	浄花院御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所ハ同通筋違橋西へ入北かわ	
百三十八丁ウ	七十二 ※	慈福寺	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ同通光明寺の北隣	
百三十八丁ウ	七十三 ※	光明寺	百万反御末寺	御本尊鳥の作	所ハ同通慈福寺の南隣	○
百四十丁ウ	七十四 ※	阿弥陀寺	同断	御本尊弘法大師の御作	所ハ同通光明寺の南隣	○
百四十三丁ウ	七十五 ※	十念寺	西山両御本寺御末寺	御本尊弘法大師の御作	所ハ同通阿弥陀寺の南隣	○
百四十五丁ウ	七十六 ※	大興寺	西山両御本寺御末寺	御本尊春日の御作	所ハ同通今出河より二町下り東かわ	○
百四十六丁オ	七十七 ※	正定院	知恩院御末寺	御本尊春日の御作	所ハ同通極楽寺の南隣	
百四十六丁ウ	七十八 ※	光福寺	同断	御本尊春日の御作	所ハ今出河の辺東河原	○
百四十七丁ウ	七十九 ※	福善寺	同断	御本尊恵心の御作	所ハ同所光福寺近隣	○
百五十丁オ	八十	福蔵院		御本尊尋ねさる也	所ハ田中村	○

丁 数	番 号	寺 院 名	寺格・本末関係	御 本 尊	所 在 地	仏/什
百五十丁ウ	八十一	守岐寺	百万反御末寺	御本尊恵心の御作	所は同村	
百五十一丁オ	八十二	正覚院	一心院末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は城東聖護院村	
百五十一丁オ	八十三	公案院	黒谷御末寺	御本尊安阿弥の作	所は黒谷門前より一町北へ行西かわ	
百五十一丁ウ	八十四	知福院	西山両御本寺の御末寺	御本尊恵心の御作	所は永観堂の門前	
百五十一丁ウ	八十五	西福寺		御本尊慈覚大師の御作	所は南禅寺の門前	
百五十一丁ウ	八十六	法界寺		御本尊小野篁の作	所は粟田口天王の近隣	
百五十二丁オ	八十七	安養院	浄花院御末寺	御本尊恵心の御作	所は同所神明へ参左手也	
百五十二丁オ	八十八	金剛寺	百万反御末寺	御本尊行基菩薩の御作	所は三条通白河橋より一町東北かわ	○
百五十三丁オ	八十九	一心院	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所は東山知恩院御境内南の方	○
百五十三丁ウ	九十	城安寺	黒谷御末寺	御本尊恵心の御作	所は同通白川橋より二町西南裏町	○
百五十四丁オ	九十一	金台寺	知恩院御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所は同通白河橋より三町西北へ入図子東かわ	○

前集下 巻之六

百五十六丁オ	九十二	正栄寺	黒谷御末寺	御本尊恵心の御作	所は同通金台寺より一町西北かわの図子	○
百五十七丁ウ	九十三	大蔵寺	西山両御本寺御末寺	御本尊春日の御作	所は同通正栄寺より一町西南かわの裏	
百五十八丁オ	九十四	超勝寺	誓願寺末寺	御本尊安阿弥の作	所は同通大蔵寺より一町西北へ入る図子東かわ	
百五十八丁オ	九十五	心光寺	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所は同所は超勝寺の向ひ隣	
百五十八丁ウ	九十六	方林寺	黒谷御末寺	御本尊恵心の御作	所は三条大橋東詰の町北かわ	○
百六十二丁オ	九十七	西願寺	知恩院御末寺	御本尊聖徳太子御作	所は三条大橋東詰下ル川端	○
百六十二丁ウ	九十八	三縁寺	同断	御本尊春日の御作	所は同所西願寺の南隣	
百六十二丁ウ	九十九	養福寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は同所三縁寺の南隣	
百六十三丁オ	百	高樹院	知恩院御末寺	御本尊運慶の作	所は養福寺の南隣	○
百六十四丁オ	百一	瑞泉寺	西山両御本寺御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所は三条小橋東詰下ル東かわ	○
百六十五丁オ	百二	善導寺	知恩院御末寺	御本尊三尊共に慈覚大師の御作	所は二条通川原町東へ入町北かわ	○
百六十六丁ウ	百三	法雲寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は同通河原町上ル東かわ	
百六十七丁オ	百四	大光院	同断	御本尊恵心の御作	所は同通法雲寺より二町上西かわ	○
百六十八丁ウ	百五	大雲寺	同断	御本尊聖徳太子の御作	所は河原町中の町二条より三町上西かわ	○
百六十九丁オ	百六	生住寺	同断	御本尊恵心の御作	所は河原町の新町二条より三町上東かわ	
百六十九丁オ	百七	常林寺	同断	御本尊恵心の御作	所は吉田口荒神の東隣	○
百六十九丁ウ	百八	専念寺	同断	御本尊三尊共に恵心の御作	所は京極通吉田口下ル草堂観音の南隣	○
百七十丁オ	百九	長徳寺	同断	御本尊三尊共に運慶の作	所は専念寺より裏寺へ入殿屋敷の北隣	○
百七十三丁ウ	百十	善香院	同断	御本尊恵心の御作	所は同所教安寺の北隣	○
百七十四丁オ	百十一	教安寺	同断	御本尊慈覚大師の御作	所は同所善香院の南隣	○
百七十四丁ウ	百十二	生蓮寺	浄花院御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は同所教安寺の南隣	
百七十五丁オ	百十三	専称寺	知恩院御末寺	御本尊比首羯磨の作	所は正蓮寺の南隣	
百七十五丁オ	百十四	正念寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は同所専称寺の南隣	○
百七十六丁ウ	百十五	見性寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は同所正念寺の南隣	
百七十七丁オ	百十六	正行寺	百万反御末寺	御本尊安阿弥の作	所は京極通下御霊の北隣	
百七十七丁オ	百十七	大恩寺	同断	御本尊慈覚大師の御作	所は同通正行寺の北隣	
百七十七丁ウ	百十八	信行寺	知恩院御末寺	御本尊定朝の作	所は同通大恩寺の北隣	○
百七十九丁オ	百十九	仏光寺	西山両御本寺御末寺	御本尊定朝の作	所は同通樺木町下ル町信行寺の北隣	○
百八十丁オ	百二十	清光寺	同断	御本尊春日の御作	所は同通仏光寺の北隣	
百八十丁オ	百廿一	西方寺	同断	御本尊定朝の作	所は同通清光寺の北隣	○
百八十一丁オ	百廿二	西昌寺	黒谷御末寺	御本尊恵心の御作	所は同通西方寺の北隣	
百八十一丁オ	百廿三	三福寺	誓願寺末寺	御本尊定朝の作	所は同通西方寺の北隣	
百八十一丁ウ	百廿四	常念寺	黒谷御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は同通三福寺の北隣	
百八十一丁ウ	百廿五	天性寺	知恩院御末寺	御本尊三尊共に運慶の作	所は同通三条上ル町東かわ	○

前集下 巻之七

百八十六丁オ	百廿六	金剛寺	西山両御本寺御末寺	御本尊尋ざる也	所は同通天性寺の南隣	○
百八十七丁オ	百廿七	西光寺	誓願寺末寺	御本尊尋ねざる也	所は同通門福寺の北隣	
百八十七丁ウ	百廿八	安養寺		御本尊春日の御作	所は同通門福寺の南隣	○
百八十八丁ウ	百廿九	善長寺	西山両御本寺御末寺	御本尊三尊共に安阿弥の作	所は同通安養寺の南隣	○
百九十丁オ	百三十	了蓮寺	百万反御末寺	御本尊恵心の御作	所は同通善長寺の南隣	○

『浄家寺鑑』 覚書—浄土宗寺院伝来の仏像調査に向けて—(熊谷貴史)

(4)

丁 数	番 号	寺 院 名	寺格・本末関係	御 本 尊	所 在 地	仏/什
百九十丁ウ	百卅一	常楽寺	西山両御本寺御末寺	御本尊運慶の作	所ハ同通安養寺の北かとり東へ入 裏寺町入南かわ	○
百九十二丁オ	百卅二	西林寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は同所常楽寺の向隣	○
百九十三丁ウ	百卅三	極楽寺	誓願寺末寺	御本尊尋ねさる也	所は同所西林寺東かとり北へ上ル南かと	
百九十三丁ウ	百卅四	光明寺	同断	御本尊恵心の御作	所は同所極楽寺の北隣	
百九十四丁オ	百卅五	西念寺	知恩院御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所ハ同所北かわ宝蔵寺の北隣	
百九十四丁オ	百卅六	宝蔵寺	誓願寺末寺	御本尊八幡の御作	所は同所西念寺の南隣	
百九十四丁ウ	百卅七	法界寺	同断	御本尊恵心の御作	所は同所宝蔵寺の南隣	○
百九十四丁オ ※	百卅八	明真寺	同断	御本尊恵心の御作	所は同所法界寺の南隣	
百九十四丁オ ※	百卅九	正覚寺	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所は明真寺の南隣	
百九十四丁ウ ※	百四十	称名寺	同断	御本尊安阿弥の作	所ハ同所正覚寺の南隣	○
百九十五丁ウ	百四十一	西導寺	同断	御本尊春日の御作	所ハ同所称名寺の南隣	
百九十五丁ウ	百四十二	浄心寺	百万反御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ同所西導寺の南隣	○
百九十六丁オ	百四十三	光徳寺	知恩院御末寺	御本尊運慶の作	所ハ同所浄心寺の向隣	
百九十六丁ウ	百四十四	大龍寺	黒谷御末寺	御本尊尋ねさる也	所ハ同所光徳寺より南へ下り 四条通へ出ル東かわ	
百九十六丁ウ	又百四十四 ※	仲源寺		御本尊湛慶の作	所ハ東山祇園の町南西かと	○
百九十七丁ウ	百四十五	青龍寺	知恩院御末寺	御本尊尋ねさる也	所ハ東山高台院南の図子東かわ	
百九十七丁ウ	百四十六	春長寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は京極通四条下ル町東かわ	
百九十八丁オ	百四十七	大雲院	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所は同通春長寺の南隣	○
百九十八丁ウ	百四十八	浄教寺	同断	御本尊春日の御作	所ハ同通大雲院の南隣	○
二百丁オ	百四十九	透玄寺	一心院末寺	御本尊安阿弥の作	所は同通綾小路下ル聖光寺北隣	
二百丁ウ	百五十	聖光寺	同断	御本尊八幡の御作	所は同通透玄寺の南隣	○
二百丁ウ	百五十一	勝門寺	知恩院御末寺	御本尊尋ねさる也	所は同通聖光寺の南隣	
二百一丁オ	百五十二	法然寺	同断	御本尊法然上人の御影	所は同通勝門寺の南隣	○
二百三丁オ	百五十三	空也寺	同断	御本尊尋ねさる也	所ハ同通法然寺の南隣	
二百三丁ウ	百五十四	浄願寺	一心院末寺	御本尊鳥の作	所は同通空也寺の南隣	
二百三丁ウ	百五十五	永養寺	知恩院御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は同通仏光寺下ル浄願寺の南隣	○
二百五丁オ	百五十六	浄国寺	同断	御本尊恵心の御作	所は同通高辻上ル町永養寺南隣	○
二百六丁ウ	百五十七	中道寺		御本尊慈覚大師の御作	所は五条左目牛井通松原上ル西かわ	
二百六丁ウ	百五十八	安養院	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所は同通五条橋通下ル西かわ	○
二百七丁オ	百五十九	大泉寺	同断	御本尊三尊共に寛印の御作	所は万寿寺通西洞院の北かわの東かと	○
二百八丁オ	百六十	大蓮寺	黒谷御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は五条橋通西洞院より半町東へ入ル町南かわ	
二百八丁オ	百六十一	長香寺	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所は高倉通松原下ル西かわ	○
二百九丁ウ	百六十二	西念寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊八幡の御作	所は五条橋通高倉下ル町東かわ	○
二百一十一丁オ	百六十三	常運院	知恩院御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所は同所西念寺の南隣	○
二百一十一丁ウ	百六十四	本覚寺	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所は五条橋通下ル寺町東かわ	
二百十二丁オ	百六十五	上徳寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は同通本覚寺下ル西かわ	○
二百十三丁ウ	百六十六	極楽寺	百万反御末寺	御本尊春日の御作	所ハ同所新善光寺の南隣	

前集下二 巻之八

二百十四丁オ	百六十七	蓮光寺	百万反御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ同所極楽寺の南隣	○
二百十六丁ウ	又百六十七 ※	竹林院	一心院末寺	御本尊聖徳太子の御作	所ハ同所蓮光寺北かとり東へ入 一町行北へ半町上ル所	
二百十六丁ウ	百六十八	等善寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊聖徳太子の作	所は同所竹林院の南隣	○
二百十八丁オ	百六十九	延寿寺	同断	御本尊金仏三體	所は同所等善寺の半町西を南へ下ル東かわ	○
二百廿丁オ	百七十	万年寺	同断	御本尊八幡の御作	所は同所長講堂の南隣	○
二百廿二丁オ	百七十一	常光院	正行院下	御本尊慈覚大師の御作	所は東洞院七条下ル町東かわ	○
二百廿三丁オ	百七十二	正行院	一心院末寺	御本尊安阿弥の作	所は同所常光院より半町下り東へ入所	○
二百廿五丁ウ	百七十四	宗徳寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊尋ねさる也	所ハ七条油小路下ル近辺	
二百廿五丁ウ	百七十五	龍岸寺	知恩院御末寺	御本尊春日の御作	所は八条の坊門大宮通下ル一の門東へ入北かわ	○
二百廿七丁オ	百七十六	福田寺	同断	御本尊春日の御作	所は九条大宮東寺慶開門の前東へ入北かわ	○
二百廿七丁ウ	百七十七	浄清院 ※		御本尊春日の御作	所は東寺北の門上ル図子東かわ	
二百廿七丁ウ	百七十八	蓮華寺		御本尊尋ねさる也	所は浄清院より上	
二百廿八丁オ	百七十九	阿弥陀寺		御本尊恵心の御作	所は東寺北門より一町西北かわ	

丁 数	番 号	寺 院 名	寺格・本末関係	御 本 尊	所 在 地	仏/什
二百廿八丁オ	百八十	念仏寺		御本尊尊ねさる也	所ハ東寺門前南の図子	
二百廿八丁ウ	百八十一	持正院 ※		御本尊弘法の御作	所は同所寺内	
二百廿八丁ウ	百八十二	権現寺	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所は七条朱雀	
二百廿九丁オ	百八十三	専求寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊尊ねさる也	所は五条松原通大宮ウ二町西へ行 又南へ二町下り西へ入北かわ	
二百廿九丁オ	百八十四	玉樹寺	百万反御末寺	御本尊尊ねさる也	所は同所専求寺の西隣	
二百廿九丁ウ	百八十五	末慶寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊尊ねさる也	所は同所専求寺の東かと上ル西かわ	
二百廿九丁ウ	百八十六	善徳寺	同断	御本尊恵心の御作	所は同所末慶寺の北隣	
二百廿九丁ウ	百八十七	西照寺	百万反御末寺	御本尊尊ねさる也	所は同所善徳寺の北隣	
二百卅丁オ	百八十八	長円寺	同断	御本尊慈覚大師の御作	所は同所西照寺北かとろ半町西南かわ	
二百卅丁オ	百八十九	良立院	西山両御本寺御末寺	御本尊行基菩薩の御作	所は同所長円寺の西隣	
二百卅丁ウ	百九十	法宣寺	百万反御末寺	御本尊恵心の御作	所は同所大宮西へ入北かわ正法院の西隣	
二百卅丁ウ	百九十一	正法院	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所ハ同所法宣寺の東隣	
二百卅丁ウ	百九十二	西応寺	黒谷御末寺	御本尊安阿弥の作	所は高辻通大宮西へ入北かわ	
二百卅一丁オ	百九十三	婦命院	知恩院御末寺	御本尊運慶の作	所は仏光寺大宮西へ入北かわ	
二百卅一丁オ	百九十四	唱輪寺	同断	御本尊慈覚大師の御作	所は同所婦命院の西隣	
二百卅一丁ウ	百九十五	成道院	同断	御本尊恵心の御作	所は綾小路大宮西へ入町光林寺の東隣	○
二百卅一丁ウ	百九十六	光林寺	西山両御本寺御末寺	御本尊恵心の御作	所は同所成道院の西隣	
二百卅二丁オ	百九十七	聖徳寺	知恩院御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所は同所光林寺の西隣	○
二百卅四丁ウ	百九十八	光縁寺	同断	御本尊尊ねさる也	所は同所北かわ法善寺の西隣	
二百卅五丁オ	百九十九	法善寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は同所西方寺の西隣	
二百卅五丁オ	二百	西方寺	同断	御本尊聖徳太子の御作	所は同所法善寺の東隣	
二百卅五丁オ	二百一	法雲寺		御本尊慈覚大師の御作	所は四条通大宮西へ入南かわ	
二百卅五丁ウ	二百二	妙厳寺	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所は同所法雲寺の西隣	○
二百卅六丁オ	二百三	更雀寺	西山両御本寺御末寺	御本尊春日の御作	所は同所北かわ悟真寺の西隣	
二百卅七丁オ	二百四	悟真寺	知恩院御末寺	御本尊恵心の御作	所は同所更雀寺の東隣	
二百卅七丁オ	二百五	休務寺	西山両御本寺御末寺	御本尊八幡の御作	所は錦小路大宮西へ入南かわ	
二百卅七丁ウ	二百六	欣浄寺	黒谷御末寺	御本尊尊ねさる也	所は同所北かわ専徳院の西隣	
二百卅七丁ウ	二百七	専徳院	百万反御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所は同所欣浄寺の東隣	
二百卅七丁ウ	二百八	浄縁寺	同断	御本尊安阿弥の作	所は四条の坊門大宮西へ入南かわ	
二百卅八丁オ	二百九	誓弘寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊尊ねさる也	所は同所浄縁寺の西隣	
二百卅八丁オ	二百十	正運寺	黒谷御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は同所北かわ	○
二百卅九丁オ	二百十一	善想寺	知恩院御末寺	御本尊安阿弥の作	所は誓願寺通大宮西へ入町南かわ	
二百卅九丁オ	二百十二	満福寺	西山両御本寺の御末寺	御本尊尊ねさる也	所は同所如来寺の東隣	
二百卅九丁オ	二百十三	如来寺	知恩院御末寺	御本尊善光寺の如来像の御移し	所は同所満福寺の西隣	○
二百四十丁オ	二百十四	光明寺 ※	西山両御本寺の御末寺	御本尊聖徳太子の御作	所は同所北かわ	
二百四十丁オ	二百十五	妙泉寺	百万反御末寺	御本尊慈覚大師の御作	所は三条通大宮西へ入南かわ	○
二百四十一丁オ	二百十六	三宝寺	同断	御本尊慈覚大師の御作	所は同所北かわ	○
二百四十二丁ウ	二百十七	来迎寺		御本尊尊ねさる也	所は同所三宝寺の北裏	

が知られる。延寿寺(二百十八丁オ)で「金仏三体」と記し、材質を特記したのも同様の意識だろう。なお「御本尊尋ねざる也」と記す場合も散見し、これも取材に基づく堅実な態度といえよう。

このような本尊に対する関心は、宗派を限らず、いわゆる「洛陽三十三所観音」や「洛陽四十八所地藏」として顕在化する⁽⁶⁾。それらは名所図会の類にも散見し、近世宗教文化の一側面として、参詣・観光にともなう仏像の求心性がうかがわれる。

一覧の「仏／什」欄は、仏像や什宝に関する記述の有無を示したものである(各記事冒頭の御本尊の説明は除く)。御本尊の詳細を追記する例もあるが、他の仏像・什宝に関する言及も多く、情報量の粗密や他資料との異同はあるものの、参照すべき側面もある。一件、「仲源寺」の項(百九十六丁ウ)「挿図」を例示しておこう。

又百四十四

御本尊湛慶の作 仲源寺

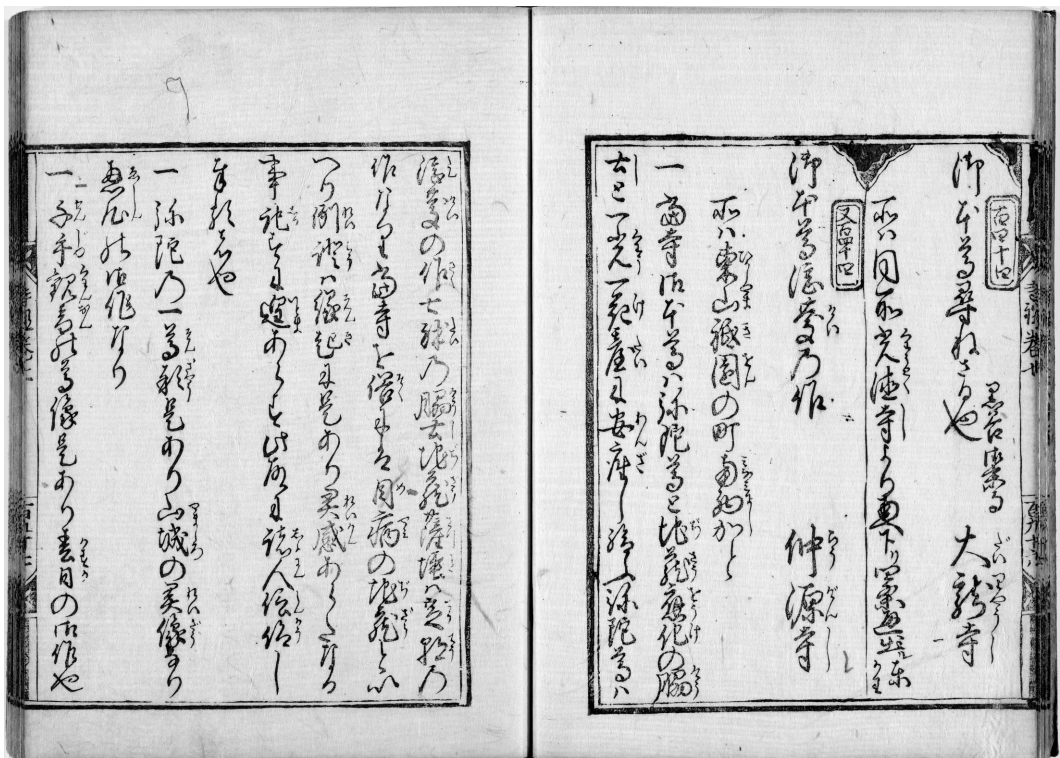
所ハ東山祇園の町南西かと

一 当寺御本尊ハ弥陀尊と地藏応化の脇／士と一光一花台に安座し給ふ弥陀尊ハ／湛慶の作七体の脇士地藏菩薩ハ定朝の／作なり当寺を俗には目病の地藏とい／へり例証ハ縁起にはあり靈感あらたなる／事記すに違あらず此故に諸人信仰し／奉る者也

一 弥陀の一尊形是あり山城の霊像なり／恵心の御作なり

一 千手観音の尊像是あり春日の御作也

右二品は当寺代々の霊像也



又百四十四 仲源寺

四条通沿いの大和大路からやや東、通称、目疾地藏として知られる浄土宗寺院である。近世地誌類にしばしば記載され、通称にまつわる地藏菩薩を本尊として祀る。しかし『浄家寺鑑』では弥陀を本尊とするなど、他資料や現行の由緒類とは異同がある。むしろ軽々に解釈すべきではないが、ある時期、ある立場の一資料として留意しておきたい。また本尊として記す弥陀尊(伝湛慶作)とは別に、「山城の霊像」とされる「弥陀の一尊形」(伝春日作)が記されている。これは現在、「山越阿弥陀像」⁽⁸⁾として伝わる御像に相当するだろう(「城」と「越」のくずし字は近似するが本記事には「しろ」の仮名が振られる)。最後に記される千手観音像は、いま観音堂に安置される定朝様の丈六像にあたる。

このような記述は、現在、諸寺に伝存する仏像・什宝について把握・遡及しようとする際にも、一定の情報源となり得る。一覧の「仏／什」欄は以上の意図により付記した。

おわりに

『浄家寺鑑』の資料的価値は諸先学も意識していたとみられ、例えば『日本歴史地名大系』で二六件、⁽¹¹⁾『新纂 浄土宗大辞典』で九件の項目に典拠としてあげられる。概して寺史を補完する伝承のひとつといえるが、断片的に潜む事実性を捨象すべきではなく、記録・刊行当時の認識や状況を反映する部分があることも看過できない。

なお近世の浄土宗寺院を網羅的に収録し、諸寺の由緒に言及する際にしばしば引用される資料が別にある。『浄家寺鑑』から降って元禄八〜十一年(一六九五〜九八)にかけ、知恩院と増上寺の連携により全国規模で宗門(浄土宗・西派)寺院の由緒が調査・集成された。知恩院蔵本は享保頃の改編を経て『蓮門精舎旧詞』⁽¹³⁾と称され、同時代では他宗に類をみない大部の寺伝資料として貴重である。この『蓮門精舎旧詞』には寺号(山号・院号)・本末関係・所在地・開山・創建年代などが記されており、教団としての公的な編纂意図がうかがえる一方、御本尊に関する言及はみられない。やはり阿弥陀如来が御本尊であることを前提とする設定であろう。

この点、相対的に『浄家寺鑑』の特徴を見出しうるが、むしろ性格の異なる資料を相互補完的に活用することを意識しておきたい。⁽¹⁴⁾言及対象(範囲)も異なり、全てを対応させることは適わないが、少なくとも洛中の浄土宗寺院に眼を向けるとき、『浄家寺鑑』との対照は有益であろう。本稿冒頭でふれた「浄土宗寺院伝来の仏像調査」は、当館の立地や寺院件数に鑑み、必然的に京都を中心に着手・展開することとなる。洛外寺院が含まれていない点は惜しまれるが、収載される範囲においては「誠に渡りに船を得たるかことく」(五丁ウ)、本稿の作業をのちの調査研究の一助としたい。

キーワード…『浄家寺鑑』、浄土宗寺院、仏像、参詣、京都

〈注〉

- (1) 平成三〇年度秋期特別展「徳器の成就に努めて智光を常照す—佛教大学附属図書館所蔵品展—」(平成三〇年一〇月二七日～一二月八日)。本稿は展覧会図録に掲載した「コラム1 近世地誌類と寺院・仏像—『浄家寺鑑』をてがかりに—」を展開したものである。
- (2) 調査名は仮称。本調査の着想に際しては本学安藤佳香教授より助言を得た。また関連する事業として、本年度より「浄土宗寺宝めぐりツアー」を実施。
- (3) 本資料は佛教大学附属図書館HP内のデジタルコレクションで公開されており、web上での閲覧が可能である。
<https://bird.bukyo-u.ac.jp/collections/>
- (4) 佛教大学附属図書館「編」『佛教大学附属図書館所蔵貴重古典籍目録』(佛教大学、二〇一二年)、一八六頁。
- (5) 明治二〇年(一八八七)の浄土宗制では、東京の増上寺および京都の金戒光明寺・百万遍知恩寺・清浄華院を四箇本山に指定。江戸時代には知恩院を含めた京都所在の四本山を京都四箇本山と称した(参考『新纂 浄土宗大辞典』)。
- (6) 例えば「洛陽四十八所地藏」について、『洛陽地藏廻り記』(寛政一一年「一七九九」刊)では靈元天皇(一六五四・一七三三)が選定したとする。成立の由来についてはなお慎重であるべきだが、江戸時代の新定を表明する本巡礼は、西国および洛陽の観音霊場など他の巡礼に倣い、近世の参詣・観光によって翻案された、信仰的・文化的な一展開といえよう。
- (7) 例えば『花洛名勝図会』(元治元年(一八六四))では「雨止地藏堂」を項目名とし説明文に仲源寺の寺名を記載、本尊地藏菩薩とする(図絵には「仲源寺」と記載)。
- (8) 仲源寺門前駒札には「本堂の地藏尊像の傍らには室町時代の作といわれ

る「山越阿弥陀像」を祀る」と記す。

- (9) 久野健「編」『仏像集成3 日本の仏像(京都)』(学生社、一九八六年)、一五二頁など参照。
- (10) なお『浄家寺鑑』自体を対象とする森鹿三「浄家寺鑑について」(藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集)藤原弘道先生古稀記念会、一九七三年)は、掲載寺院の列記・紹介を含め、本稿に先立つ資料紹介的な先行研究として参照される。
- (11) 『日本歴史地名大系』(JapanKnowledge Lib)、検索日:二〇一八年十一月三〇日。
- (12) 浄土宗大辞典編纂委員会「監修」浄土宗大辞典編纂実行委員会「編集」『新纂 浄土宗大辞典』(浄土宗、二〇一六年)。および web 版『新纂 浄土宗大辞典』、検索日:二〇一八年十一月三〇日。
- (13) 『浄土宗全書』続第十八・十九卷(山喜房佛書林、一九七三年)所収。うち第十八卷所載の竹田聴洲「蓮門精舍旧詞解説」に本書の概要が記されるほか、これに先行する同『民俗佛教と祖先信仰』(東京大学出版会、一九七一年)所収の附論I~IVなども参照される。
- (14) このほか近代の資料として、明治期に内務省が各府県に提出させた「寺院明細帳」なども留意される。

〔付記〕

本稿の執筆にあたり、佛教大学宗教文化ミュージアム平成三〇年度秋期特別展に際して佛教大学附属図書館より提供いただいた資料を活用し、また挿図の掲載にかかる許可を得ました。記して謝意を表します。